

測定室だより

No. 18

1993年2月27日

発行 放射能汚染食品測定室 代表藤田祐幸

¥300-

事務局 横浜市港北区日吉4-1-1 慶応義塾大学物理学教室 藤田祐幸 気付

電話 045-562-2279 (FAX兼用)

振替 東京9-118321 放射能汚染食品測定室

測定室開設五周年記念 「寄り合い」の報告

藤田 祐幸

各地で測定活動を続けている人々のところに、ある日、次のような「寄り合い」のおさそいの手紙が届けられました。

天高く、原発事故増える秋となりました。お元気でご活躍のことと思います。

私たちの『放射能汚染食品測定室』は1987年秋に発足し、この秋で5周年を迎えました。この間、全国各地に測定器を手にした市民が登場しました。しかし、世間の放射能汚染に対する関心も薄れ、測定活動を維持していくことも、なかなかしんどい時代にもなりました。

測定室では、発足5周年を記念して、測定活動の現状や悩みを語り合い、今後の運動の進め方などを模索する『寄り合い』を開くことにいたします。各地で実際に測定に携わっている方々にお集まりいただいて、日頃悩んでいることや、困っていること、判断に苦しむデータなど、について話し合い、みんなで考えてみたいと思います。できるだけ具体的なデータや資料などご持参のうえ、ぜひご参加下さいますようお願いいたします。全国の皆様との再会を楽しみにしております。

放射能汚染食品測定室

11月1日、東京で開催された『寄り合い』には、この呼びかけに応じて二十人が集まって、これまでの活動報告や、具体的な問題や今後の見通しなどについて語り合いました。

遠くは九州のグリーンコープの中西さんや大阪の「はかる会」の中地さんなど、懐かしい顔とも久し振りの再会です。当日の参加者は次の通りです。

田熊久枝（藤沢市放射能測定器運営協議会）、山田玉恵・有吉政江（Lコープ）、小能あき子（茨城労生協）、中西次郎（生協連合グリーンコープ）、中地重晴（たべものの放射能をはかる会）、荒木政子・伏屋弓子（小金井市放射能測定協議会）、島京子・武藤有子・西塔文子（中野区・放射能測定室利用者連絡会）、藤谷政子（首都圏コープ）、井上啓（日消連）、椎名公三・樋田博（生活クラブ連合会）、大東断・小泉好延・渡辺美紀子・藤田祐幸（放射能汚染食品測定室）、鈴木千津子（たんぼぼ舎）〔敬称を省略しました〕。

それぞれ測定器の運用などはまちまちです。自前で装置を買い込んだのは、グリーンコー

プ、はかる会、たんぼぼ舎と「測定室」です。藤沢市では市が装置を購入し市民が自主運営を行っています。中野区、小金井市、柏市などでは市が測定装置を管理しています。生活クラブ生協と首都圏コープは『測定室』に測定依頼する形で測定運動に参加しています。

寄り合いは、まず『測定室』からこれまでの経過などについての話がありました。

運動の成果と問題点

チェルノブイリ事故による輸入食品汚染は1986年の秋から問題になり始めました。厚生省は375 ベクレル/kgという基準を設定し、検疫段階に於ける検査を開始したのですが、私たちはこの基準値を認めるわけにはいきませんでした。度重なる交渉で、厚生省の基準には何ら根拠のないことが明らかになってきましたが、一向に埒があかないまま年を越しました。私たちは、食べるか食べないかを決めるのは一人一人の問題であって国家が勝手に決めるのは問題だ、せめて測定結果を公表するように、と要求したのですが、その間に



写真 「寄り合い」での話し合い

も店にはどんどん汚染食品が並んでしまうという状況になりました。

そこで私たちは、自前の測定器を購入して市民による監視行動を始める決意を固めざるをえなかったのです。1997年の秋に「放射能汚染食品測定室」が活動を開始しました。当初、食品業界から「合法的に安全を保障されている食品に対する営業妨害」などの告訴の可能性を警戒したのですが、実際には食品業界が同じような測定器を備えて自主的に規制するという事態になりました。その背景には、食品汚染問題を契機に多くの市民が立ち上がり、伊方の調整実験反対の運動が盛り上がったことがありました。

1998年の春頃から、町の食品店からほとんどの放射能が消えてしまいました。私たちの運動により、国の370ベクレルという基準を全く無意味化したといっていいいでしょう。私たちは、全国に、市民による監視行動に参加するように呼びかけました。藤沢市を先頭に次々と測定器購入運動が広まり、今ではおそらく数十の県や市区町村に測定器が設置されるようになりました。多くの市民があらゆる食品の放射能を測り続けるという運動は世界にも稀な運動でした。

飼料用脱脂粉乳の放射能汚染事件(1989年)を最後に問題はほとんど無くなりました。そして、私たちが拒否した汚染食品は何処に行ってしまったのだろうか、という問題が残されました。私たちは、アジアやアフリカに友人や知人のいる人々に、世界中のミルクを私たちのもとに送ってもらいたいと呼びかけました。この呼びかけに幾つかの国からミルク

が送られてきました。幸いなことに、それらの中からは放射能は検出されませんでした。

そして、放射能の問題に対する世間の関心が薄くなり、測定の依頼も激減するという事態の中で、この五周年を迎えることになりました。今では、運動を継続することが困難になってしまいました。成果をあげたことによる新たな困難に直面しているのです。

これが主催者からの挨拶でした。次に、参加者の自己紹介を兼ねた問題提起が続きました。そこで出された問題のいくつかを紹介しましょう。

データの読み方について

測定を繰り返すと数値が違ってしまふ、時間をかけても誤差が小さくならない、などの問題が、柏や小金井のグループから出されました。小泉さんはこれらの問題に丁寧に応えてくれました。精度を高くするためには、検体の重量を多くする努力をすること、測定時間を長くすること、が原則です。微量の放射能を測定するためには、検体を細かく砕いて密度を大きくしたり、焼いて炭や灰にして測るなどの方法がありますが、やや技術的に困難な問題もあります。

そのような努力をしても、私たちが使っている測定器ではどうしても数ベクレル/kg以下については確かな数字を得ることは難しいでしょう。測定限界の問題です。数値にこだわるのではなく、測定結果のスペクトルを目で確かめることが必要です。数値は小さくてもセシウムのピークがはっきりしていれば、微量ではあれ放射能の存在は確かです。ピー

クの形が乱れていても数値が出てしまうこともあるのです。何よりもまずピークの形を必ず見ることが大切なことです。

柏の測定器について言えば、ピークをはさむカーソルがずれているようです。これでは何を測っているのか分かりません。メーカーと相談して、標準試料による較正をする必要があります。(図1)

情報の取扱いをめぐる

中野区や小金井市では10ベクレル以下はゼロと見なされ、それ以上のものについては確認のために別の機関に再測定を頼んでいるようです。そして得られた結果は測定依頼者にもみ伝えることになっているために、どのような結果が出たのかについての全体像が明らかにならない、などの問題も起こっているようです。中野区では情報公開条例を使ってようやく見ることが出来るという状態とのこと。

この装置では大体1ベクレル程度のもので、数値はともかくとしても、有るか無いか

はピークの形を見れば判定することができるはずですが、ダブルチェックを行うのであれば、測定限界に近い試料について、さらに精度の高い測定を行う必要があります。はっきりと出ているものをさらに確認する必要はないでしょう。データの公開の問題も含めて、行政の考えていることは、どうも普通の市民の感覚では分からないことが多過ぎます。

今後は、何らかの数字が出た試料、あるいは、放射能の『気配』のある試料については、「測定室」でダブルチェックを行うことにいたしますので、測定した検体はそのまま測定室に送っていただきたい、ということになりました。

原発事故に備えて

どこでも、苦勞してようやく測定器の設置にこぎ着けたのですが、日ごとに市民の関心が薄れてきて、測定依頼の件数がほとんどゼロに近づいています。行政側からは『それ見たことか』と言った態度をとられて困ってい

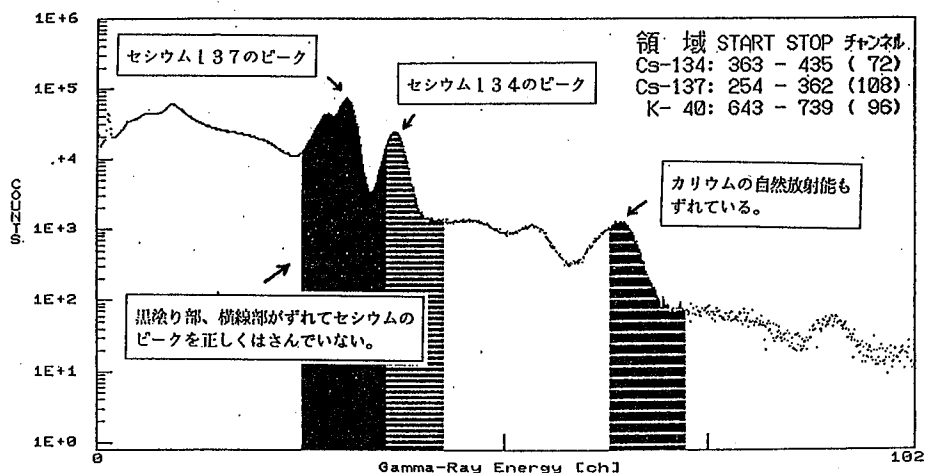


図. 1 ピークをはさむカーソルがピークからずれている。測定した意味がなくなる。

る所も多いようです。

市民による監視行動は、当初の目的を達成したのですから、その結果測定依頼が減るのは止むを得ないことです。それでも、測定運動を続ける意味はどこにあるのでしょうか。

一つは、監視の目があることによる緊張感が食品業界や輸入商社に対する圧力となっている現状があります。我々が撤退してしまえば、何が起こるか分からないのです。

そして、もう一つの問題は、いつ起こるか予想することもできない原発事故に対する備えです。突然襲ってくる放射能による汚染は、目で見ることができません。その時に、測定器があるにもかかわらず作動しなければ何の役にも立たないのです。そのためにも、継続的に測定を続けることが必要でしょう。また、測定の結果を多くの市民が直ちに知ることができるような体制を整えておくことも必要でしょう。

事故が起こった時には、先ず牛乳や野菜からヨウ素が検出されるはずですが、現在の測定

装置ではヨウ素の数値を出すことはできませんが、スペクトルを見れば、出ているかどうかは分かります。そのような事態が起これば、測定室は直ちに対処するつもりですので、事務局に連絡をとるようにしましょう。

事故前の状態を把握する

事故が起きて環境が汚染されてしまえば、本来の状況は永遠に分からなくなってしまう。今のうちに、基本的な食品の中の放射能の状態を測定しておく必要があります。全国の測定器を使って、米や牛乳、乳児用脱脂粉乳、緑茶などのデータをそろえておく必要が強調されました。定期的に、産地の分かっている食品についてのデータを積み上げ、それぞれの団体にそれらを共有化しておくことが必要です。今後は、おたがいに機関誌を交換しながら、データを蓄積することを目指して、さらにこの運動を続けていくことになりました。

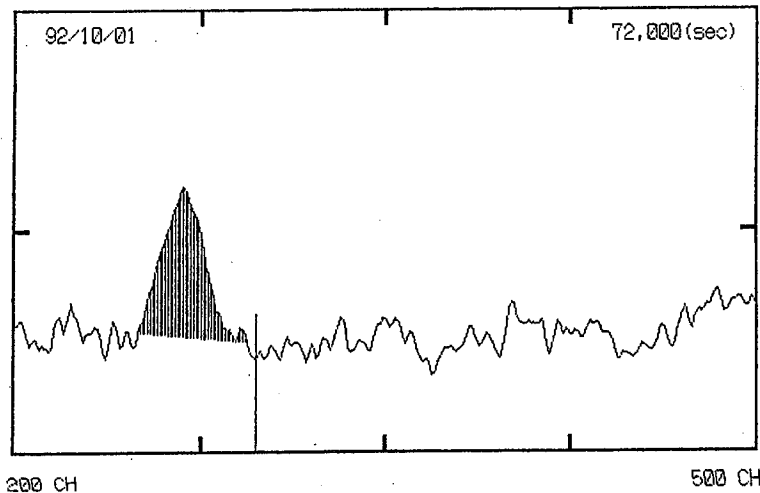


図2. 5ベクレル以下でも、セシウム137のピークははっきりわかる。

放射能だけではなく

食品の問題は放射能だけではないことも、何人もの参加者から指摘されました。放射能測定運動の経験を生かして、農業や化学物質による汚染の監視運動を展開することができないだろうか、という問題です。放射能分析に比べると、化学分析には多くの手間がかかります。しかし、その気があれば高校の実験室程度の設備があれば可能とのこと。学校の先生と生徒の協力があれば、どこでもできるかもしれません。新しい運動の展開の可

能性があります。

「寄り合い」はこんな問題を議論して終わりました。参加した方々は、それぞれの地域で具体的な問題に関わっておられるだけに、問題は具体的なものが多く、そのすべてをここに書くことはできませんでした。

日頃モヤモヤしていた悩みを吐き出してみれば、みんな同じ問題を抱えていたことが分かり、なんとなく元気になった一日でした。終わってからのビールののどごしは、実に心地好いものでした。

中野 放射能測定室利用者連絡会 の現状とこれから

「放射能測定室利用者連絡会」が発足してから、もうじき4年になる。東京都中野区の場合、放射能測定を消費者相談の一環として捉え、区民からの申し込み受け付けは消費者センター、測定は衛生試験所が行い、結果の公表を微力ながら私たちが担ってきたからだ。

活動の主なものとして、隔月のニュース「ピコ ピコ」の発行、定期的な測定依頼、年2回の講演会開催、中野区議会への様々な陳情等を行ってきた。賛同人から月千円の賛同費を募り、これを活動費としており、活動は世話人（現在6名、皆、幼い子供を抱えている）が中心となって行っている。

この4年の間に、世話人は1人抜け2人抜けてだいぶ淋しくなり、放射能汚染食品が市場に出回ることも少なくなり、測定室の稼働率も低下して、私たちの活動に必要性があるのかどうかも含め、世話人で何度も話し合いを重ねながら試行錯誤してきた。

その中で、私たちは区民の要望で区に設置させた測定器を、動かし続けさせる責任があること、いつチェルノブイリのような事故が起きてもおかしくない状況にあり、測定器がすぐ測定できる状況を維持すべきであること、放射能測定は安全な食品を選びたいという目的と共に、身近な食品汚染という問題からそれまで原発に関心のなかった人々にその危険

性を知ってもらう手段でもあったこと、等から活動は続けて行こうという結論に達した。

そして、私たちにできることは、測定器を動かし続けることと、原発の危険性を1人でも多くの人に知ってもらい、反原発の底辺を広げる努力をすること、そのためには、ニュースも今まで通り発行し身近な様々な問題も取り上げて行こうということになり、現在に至っている。

それと同時に、中野区での測定受け付けのあり方の見直しと、測定結果を行政が公表す

ることを求めて、行政との話し合いを続けていく予定である。

恥ずかしながら、先日の測定室交流会で測定器から打ち出される波形のグラフの重要性を初めて知り、この波形のプリントアウトを測定依頼した人に渡すように求めることと、これを資料として私たちが保管しておくこと、特定の品物を定期的に測定し続けることも、今後の課題にしたい。「続けることに意義がある」と自分達を励ましながら・・・。

(島 京子)

藤沢市放射能測定器運営協議会 の今後に向けて

協議会が発足してより、1993年3月で4年が経過します。当たり前の生活の中で安全に暮らすことを基本に考え、測定器購入からはじめ、ずっと測定し続けてまいりました。

協議会としては地方行政の中での位置づけを再考する時期となりました。1993年度より、行政に対し予算を確保してほしい等、要望を提出しています。どうやら担当課においては、厳しい行革の中ではありますが、受理の方向で対処してくれそうです。今後の動きが円滑になることと思います。

世相の流れと致しましては、測定し続けることの意義と放射能を生み出す生活形態を見直し、かつどのような暮らしを選択して行くのかを、市民の一人として考えることが、世

論を動かす第一歩だと認識しています。

藤沢市と市民の相互の協力の上で、市民生活を考えるという形は、当協議会だけではなく、いくつかの事例があります。市民自治を大切に考え行動することは、日常生活の中でこのような、不確かな時期であるからこそ、考え合わすことの難しさと、また意義を感じます。

今後の方向付けとして考えていますのは、年間予算の内容として市民公開での学習会を実施することと、市関連事業と連絡を取り合うことなどを、考えています。

特に学校給食担当課、消費者関係団体等への働きかけを大切に運営していくことにより、相互理解を深められることと考えます。学習

会の実施は、年間2回を予定し、その他に協議会として機器の取扱いなどの直接的な（運営にかかわる方を増やすために）勉強会も企画する予定です。データの管理と情報の伝え方については、1993年度の課題だと思っています。市民への知らせ方については、「広報ふじさわ」に掲載できるように、担当課と

話しあっています。また、情報公開に当たっては、当協議会の責任の上で行うことになっていますが、市行政と相互の協力で運営していくということで、慎重に考え運営していくことが、現状では大切だと思っています。

（藤沢市放射能測定器運営協議会会長
田熊 久枝）

柏市放射能測定運営協議会の活動

柏市放射能測定運営協議会が測定を開始したのが91年の6月。毎火・金曜日、週2回のペースで測定。ワイン以外のほとんどのものは検出限界値以下で、ほっと胸をなで下ろしているところ。

協議回は13団体、40名程の測定員で構成。柏市からの年間30万円の補助金は検体購入、広報、学習会、研修会等に充当。多くの市民に呼びかけて消費生活センターで行った学習会「やさしい放射能の話」では、東大の小泉先生、慶応の藤田先生を講師に。けっしてやさしくない放射能の話でしたが、「チェルノブイリのナマの様子を初めて聞いて驚いた。」といった反応が多く聞かれました。

研修会は、藤沢市の測定室の見学や帝京技術大学の石大先生の教室を訪ねたりと、測定員の親睦も兼ねて市街へ出での活動となっています。

柏市では毎年、消費生活展を盛大に行っていますが、測定室もパネル参加します。現在、

ビデオ、写真、パネルなどを使った効果的な展示内容を検討中。その他、デパート、そごうの協賛で催された「広河隆一写真展」の後援など、測定室のPRになることは積極的に行っています。しかし、まだ広く市民に知られるというところまでいっていないのが現状です。

私たちは食品添加物のみならず、放射能汚染も気にしながら食生活を考えていかなければならない社会に生きています。子の状況をしっかりと認識し、安心して暮らせるようにするには、一人一人が今、何を知り、それをどう理解し、行動に結びつけていくか、今を生きる一市民に課されている問題はとて大きく重い。

あふれる情報の中で生きているように思っていました。測定活動を通して次第に見えてきた閉ざされた情報、その大きなものに不気味さを感じているこの頃です。

（伊藤町子）

放射能測定結果

1992年9月 ~ 1993年1月

	測定年月	品名	生産地	セシウム合計 (Bq/kg)
乳製品	92.9	チーズ	日本	検出せず
	92.12	牛乳	日本	検出せず
米 小麦粉	92.11	玄米、もみがら	日本	検出せず (いずれも)
	92.12	玄米 (2検体)	//	検出せず (いずれも)
	92.12	マカロニ	//	検出せず
	92.12	スパゲッティー	//	検出せず
	92.12	パン (2検体)	//	検出せず (いずれも)
	93.1	ビーフン	中国	検出せず
きのこ	92.10	しめじ、なめこ	日本	検出せず (いずれも)
	92.12	生しいたけ	//	5以下
魚 肉類	92.9	豚肉、牛肉	日本	検出せず (いずれも)
	92.10	加工肉、コンビーフ	//	検出せず (いずれも)
	92.10	鮭、たら	日本、不明	検出せず (いずれも)
	92.11	ししゃも (2検体)	カナダ、ノルウェー	検出せず (いずれも)
茶 飲料	92.10	ワイン	ポルトガル	検出せず
	92.10	ココア	ガーナ	検出せず
	93.1	ワイン	イタリア	検出せず
その他	92.9	こんぶ、酢、みそ	日本	検出せず (いずれも)
	92.9	メイプルシロップ	カナダ	5以下
	92.11	ソース	日本	検出せず
	92.12	ザーサイ	//	検出せず
飼料	92.9	代用乳	日本	検出せず
	92.9	配合飼料 (4検体)	//	検出せず (いずれも)
	92.9	配合飼料	//	5以下
	92.10	配合飼料 (2検体)	//	検出せず (いずれも)
	92.10	乾牧草	//	検出せず
	92.11	配合飼料	//	検出せず
	92.11	脱脂粉乳	//	検出せず
	92.12	配合飼料	//	検出せず

ベラルーシ共和国の食品汚染データ

ゴメリ州チェチェルスク地区1992年の状況について

小泉好延（東京大学）

汚染にみまわれ地域は事故後6年経過した今日でも移住問題や食品汚染に揺れている。被害地の支援活動を行っている〔チェルノブイリ・セミパラチンスクに放射能測定器をおくる会〕は、前年に続き、1992年も同共和国のモギリョフ州クリチェフとクラスノポリエを訪問して測定器などの支援を行った。また、前年支援したゴメリ州チェチェルスクを再び訪問して、放射能対策を行っている保健局と被曝に関する情報や交換交換を行った。ここでは、支援した測定器を使って現地で行われている汚染検査のデータを持ち帰ったので、その一部を紹介する。

なお、同支援訪問の詳細は『クルチェフ・チェチェルスクに放射能測定器をおくる訪問の記録』に書かれているので参考にしてほしい。報告書は郵送料に一部100円を添えて下記の所へ申し込めば入手できる。

東京都千代田区西神田2-7-14
西神田ビル4F たんぼぼ舎内
「チェルノブイリ・セミパラチンスクに
放射能測定器をおくる会」

食品中のセシウム-137の汚染状況

〔乳製品〕：牛乳の汚染は1リットルあたり263ベクレルと依然として高い濃度にあるものと、15ベクレル程度から検出限界値以下とに分かれている。生クリームなど他の乳製品はいずれも低い値となっている。

〔肉類〕：牛肉に強い汚染をもつものがあることを示している。日本に持ち帰った牛肉試料の測定結果も同様な結果となった。また、牛肉の方が豚肉よりも汚染濃度が高いことがはっきりと示された。

〔野菜・果実〕：森でとれるブルーベリージャムを除き、検出限界値かその付近の低い値となってきた。

牛乳の汚染

同じ汚染地域で、何故〔牛乳〕にこのような大きな汚染の違いが出るのであろうか。昨年以降から続けている同地域の私の測定結果でも民間と集団農場のミルクの汚染に大きな違いが認められる。

原因について現地で議論をした結果、広大な集団牧場で飼われている牛に比べて個人所有

の牛が汚染度の高い森の脇や河川の土手の草を食べさせているためであろうとの結論となった。しかし、それだけではないようだ。今回の牛乳データの1試料ではあるが、集団農場でも高い濃度の汚染を示している。牧場内のどこかにローカルに高い濃度の汚染を持つ場所があると考えないと説明できそうにない。

汚染データ管理と対策

いずれにしろ、牛乳における大きな汚染の違いから学ぶことは、現地担当者がこのような事実を見逃さず、検査結果を自ら整理して原因を的確に把握することにある。そうしてこそ、地域内のローカルな汚染と食品汚染に対する被曝対策が可能となって来るのであろう。マクロなセシウム汚染分布と食品汚染の基準の適合検査といったことだけではきめ細かい被曝低減対策ができないことは言うまでもない。残念であるが現状は必ずしもそのようになっていないようである。住民と直接に接する最末端に位置している地域組織が確実に機能するか否か、このような汚染データを被曝低減にどのように生かすかは極めて重要なことである。

上部組織にデータを差し出せば事足りるという感じのあったこれまでの姿勢に変化を見せること、それを私たち支援している者は期待しているのである。また、検討なしにデータを一人歩きさせたり、同一地域のデータであるからといって単純に平均化したり、高いあるいは低い濃度の個別データだけを取り上げて議論することも実状を把握する上で混乱をもたらすだろう。

【編集後記】

1月12付けの朝日新聞に、『厚生省 輸入食品の放射能検査 7年ぶりに解除へ』という見出しの記事が掲載されました。突然の報道に私たちも驚きましたが、測定室など16団体で、1月26日に厚生省に話し合いの要望書を提出し、2月9日に厚生省交渉を持ちました。また、飼料用脱脂粉乳などの検査体制にも波及するおそれがあるため農水省交渉も予定しています。検査体制の変更内容とこの間の交渉経過、内容など次号で特集します。本来、昨年12月末かこの1月はじめには発行予定であった今号の発行の遅れを取り戻すべく、早急に次号を発行する予定です。

【測定依頼】

測定費用は、個人依頼の場合1検体につき3,000円、団体依頼の場合1検体につき5,000円です。測定試料は1kgあるいは1リットル程度が目安です。

【購読依頼】 『測定室だより』の購読料は、年間で1,500円(送料込み)です。10部以上まとめた購読は、1部あたり1,000円です。

【お申込は事務局まで】

◎ 表記の横浜、日吉の事務局。

◎ 測定器の設置してある

東京都千代田区西神田2-7-14西神田ビル4Fたんぼ舎内、放射能汚染食品測定室 TEL03-5275-2480 FAX03-3238-0797 (鈴木まで)

いずれも、連絡可能です。